3　バラの新しい収穫法による増収技術

ねらいと成果

本誌No.108で報告した短茎切り花を多く収穫できる「一定長収穫法」に改良を加え、長茎切り花（70cm）の多収を目的とした「一定長・切り下げ収穫法」を新たに考案した。この収穫法を用いると、切り花本数は慣行の基部収穫に比べて周年で40％以上、需要の多い秋冬期には65％以上増加する。

内　容

「一定長・切り下げ収穫法」の概略を図１に示した。アーチング仕立てでロックウール栽培した品種「ローテローゼ」を一定長（70cm）で収穫（１番花）し、その下部茎を１次採花母枝とする。１次採花母枝から発生したシュートが開花した時点で２番花として一定長で収穫し、その下部茎を２次採花母枝とする。２次採花母枝から発生したシュートは３番花として２次採花母枝を１節付けて収穫する。３番花は２次採花母枝を１節ずつ切り下げながら収穫することになる。２次採花母枝が1次採花母枝まで切り下げられると、１次採花母枝を1節付けて収穫する。１次採花母枝から発生したシュートは２番花として再び一定長で収穫する。以降はこれらの操作を繰り返す収穫法である。基部収穫は採花母枝を仕立てずに絶えず茎の基部から収穫する。

切り花本数は一定長・切り下げ収穫により15.0本／株（基部収穫）から21.4本／株と43％増加した（図２）。これを時期別にみると、10～12月と１～３月の増加効果が大きく、それぞれ65％増、69％増になった。得られた切り花の収穫割合は、１番花が10.7％、２番花が31.8％、３番花が57.5％であった（表）。切り花長は１番花と２番花が約70cm、３番花が約78cmで、基部収穫の約81cmに比べて短かったが、流通しているバラ切り花は70cmが最上級にあたるので、問題にはならない。切り花のボリュームを示す指標となる切り花重／切り花長値は収量割合の高かった３番花で低くなり、ボリュームが不足気味になった。しかし、市場卸売り価格の高い10月から３月にかけての増収程度が65％以上になることを考慮すると、経営面からみても有効な収穫法であると期待される。

今後の課題

３番花のボリューム不足を補う技術及び採花母枝を仕立てている間の同化専用枝更新技術の開発に取り組む予定である。

小山　佳彦（農業技セ・園芸部）

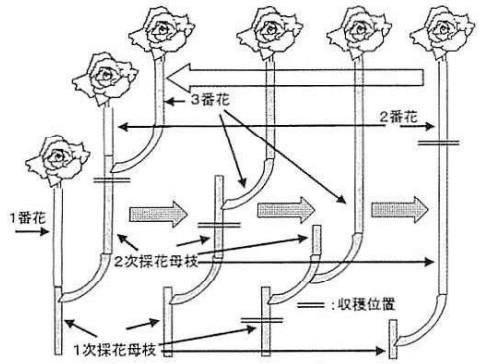

図1　一定長・切り下げ収穫の手順

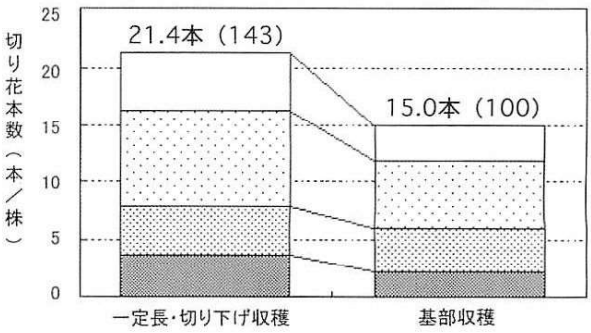

図2　一定長・切り下げ収穫と基部収穫の時期別切り花本数の比較

■1-3月 □4-6月 □7-9月 □10-12月

表　一定長・切り下げ収穫における番花別収穫割合と切り花の形質

収穫方法	番花	収穫割合（%）	切り花長（cm）	切り花重（g）	切り花重／切り花長	切り花節数（節）
一定長・切り下げ	1	10.7	69.6 ± 1.6	40.8 ± 9.7	0.59 ± 0.14	10.8 ± 1.7
	2	31.8	69.4 ± 2.7	30.7 ± 10.4	0.44 ± 0.15	10.8 ± 1.5
	3	57.5	77.8 ± 9.4	28.0 ± 8.4	0.36 ± 0.08	14.5 ± 1.6
基　部	―	―	80.6 ± 11.9	36.0 ± 15.5	0.43 ± 0.14	13.5 ± 2.1

数値は平均値±標準偏差